学生確保の見通し等を記載した書類

目　　次

１．学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況及び必要性

（１）学生の確保の見通し ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

（２）学生確保に向けた具体的な取組状況（予定を含む。）　・・・・・・・　７

２．人材需要の動向等社会の要請

（１）人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）　・・・　16

（２）（１）が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

１）社会的、地域的な人材需要の動向 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　18

２）修了学生の最近の就職状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　21

３）医療機関・企業等への採用意向調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22

１．学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況

（１）学生の確保の見通し

１）定員充足の見込み

2001 年４月に大学院医学研究科と大学院歯学研究科両研究科が大学院医歯学総合研究科に統合され、博士課程は生体制御科学専攻、病態制御科学専攻、機能再生・再建科学専攻、社会環境生命科学専攻の４専攻（９講座）へ改組された。2005 年４月には、６年制薬学部薬学科に対応するため、大学院自然科学研究科の薬学系教員を上記４専攻のうち３専攻に分散移行して大学院医歯薬学総合研究科に名称変更を行った。2021 年５月１日現在、大学院医歯薬学総合研究科（博士課程）は、生体制御科学専攻（入学定員 25 名）、病態制御科学専攻（入学定員 62 名）、機能再生・再建科学専攻（入学定員 28 名）及び社会環境生命科学専攻（入学定員 13 名）の４専攻で構成され、入学定員は計 128 名、収容定員は計 512 名である。

今回の改組は、学修者主体の「学位プログラム」を大学院における教育研究の軸に据え、従来型の研究領域の枠組みを越えて教育組織と資源を柔軟に結集するため、研究テーマによって包括された現在の４専攻から、大括り化された「医歯薬学専攻」へ 2023 年４月に改組するものである。

医学・歯学・薬学は、応用生命科学の一領域として共通の概念と理解に立脚している。他方で、基礎学部として医学部・歯学部・薬学部の６年制学士課程を擁し、社会から養成を付託されている人材像も医学・歯学・薬学で異なる。そこで、前者に対応するため、医歯薬学専攻として大括り化しつつも、後者に対応するため、人材養成目的が異なる３つの学位プログラム（医学学位プログラム、歯学学位プログラム、薬学学位プログラム）を編成する。各学位プログラムの３つのポリシーの策定や、入試広報と入学者の確保、教育課程の編成・実施・評価・改善、キャリア支援について、それぞれ医学系講座、歯学系講座、薬学系講座が第一義的に責任を負う運営体制とする。授与する学位についても、従前と同様に博士（医学）、博士（歯学）、博士（薬学）又は博士（学術）とする。加えて医学領域及び歯学領域では、専門性及び進路の面で多様な人材の養成が求められる。また、社会が求める人材像も時代とともに変化していく。このような人材養成の要請に柔軟かつ継続的に応えるため、医学学位プログラム及び歯学学位プログラムでは特色ある教育課程を有するサブプログラムを設定する。

2017 年度から 2021 年度までの５年間の博士課程４専攻の入学者数合計は、平均 140 名（平均定員充足率は 109%）であった。また、今回の改組による医学・歯学・薬学の密接な共同による教育研究と、特色ある学位プログラム・サブプログラムの設定による社会ニーズ（以下詳説）を勘案し、従前の４専攻の入学定員、収容定員の合計値と同数の入学定員 128 名、収容定員 512 名とする。（資料１）

３つの学位プログラムでは、社会の要請に基づく人材養成目的、教育課程、学生募集の考え方が異なるため、以下の学位プログラムごとに定員を設定し（４頁の表）、学生確保の見通しについて記載する。

①　医学学位プログラム

基礎学部である医学部医学科４年次～６年次の学生（268 名：回答率 72.0%）及び医歯薬学総合研究科医歯科学専攻(修士課程)全学年の学生（40 名：回答率 100%）、初期研修・後期研修医（118 名：回答率 82.5%）に対するアンケートを実施した。その結果、医学科学生の 195 名(72.8%)が大学院進学(ART プログラムを含む)に興味ありと回答し、そのうち本研究科への進学を考えている者は 137 名（70.3%）であった。全体数のうち、Pre-ART

生(科目等履修生)は 49 名(18.3%)であった。医歯科学専攻学生においては 14 名(35.0%)が大学院進学を考えており、本研究科への進学を希望する者は 12 名（85.7%）であった。初期研修・後期研修医においては、多数の 88 名（74.6%）が大学院進学に興味を持っており、45 名（51.1%）は、本研究科への進学を予定又は希望していた。これらに加え、医学系分野では毎年 15 名程度の外国人留学生が入学している。

医学系の入学者数の過去５年間（2017～2021 年）における推移を考慮すると、それぞれ 110 名（122.2%）、114 名（126.7%）、108 名（120.0%）、99 名（110.0%）、99 名（110.0%）であり、医学系の定員数 90 名を上回る入学者数を、過去５年間にわたり安定して獲得(平均 117.8%)している。以上のことから、医学学位プログラムの定員（90 名）は充足が見込まれる。

②　歯学学位プログラム

基礎学部である歯学部の在学生に対するアンケート結果（307 名：回答率 97.5%）によれば、229 名（74.6%）の者が大学院進学を考えている。その中で、136 名（59.4%）は本研究科に進学することを考えており、1 学年平均 23 名が本研究科を希望していることになる。また、既卒者においても、32 名（60.4%）が大学院進学に興味を持っていた。さらに、歯学系分野では毎年８～20 名の他大学出身者と５～９名の外国人留学生が入学している。

過去の入学者数に視野を移すと、2017 年から 2021 年まではそれぞれ 35 名（109.4%）、31 名（103.1%）、26 名（81.3%）、44 名（137.5%）、22 名（68.8%）であり、歯学系の定数を 32 名と考えた場合、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を大きく受けた 2021 年を除くと平均 106.3%で、定員を充足できることを示している。

なお、2022 年入学の入試においては、歯学系分野の志願者については 39 名（定数の 121.9%）と回復しており、このことからも優秀な学生を毎年確保し、歯学学位プログラムの定員（32 名）を充足することが見込まれる。

③　薬学学位プログラム

基礎学部である薬学部の在学生に対するアンケート結果（214 名：回答率 53.4%）によれば、現役生のうち 15 名（9.5%）の者が大学院進学を考えており、その中で、13 名（87%）は本研究科に進学することを考えていた。また、既卒者の大学院進学実績は 12.5%であり、そのうちの 71.4%は本学に進学・修了していた。

入学者に視野を移すと、2017 年から 2021 年までの入学者はそれぞれ０名、３名、２名、１名、４名であった。なお、2022 年入学の入試においては、薬学系分野の志願者は５名であり、ここ数年増加傾向が認められる。入学者に占める内部進学者の割合は、概ね 50%であり、直近３年の平均で２名程度は外部（社会人学生）から入学している。在学生に対するアンケート結果から年４名程度の内部進学者が見込まれたことから、薬学学位プログラムの定員（６名）は充足が見込まれる。

以上をまとめると、設置に際して想定している入学定員 128 名を充足することは十分可能と判断される。

表　入学定員と収容定員

大学院医歯薬学総合研究科 医歯薬学専攻（博士課程）		
学位プログラム	入学定員	収容定員
医学学位プログラム	（90 名）	（360 名）
歯学学位プログラム	（32 名）	（128 名）
薬学学位プログラム	（6 名）	（24 名）
合計	128 名	512 名

２）定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

①　医学学位プログラム

医学学位プログラムに求める教育・研究内容や入学意向を調査する目的で、医学部医学科学生、医歯科学専攻学生、初期研修・後期研修医に対してアンケート調査を行った。

基礎学部となる医学部医学科学生（４年次～６年次）に対して行った調査結果を資料４に示す。対象となる学生は 372 名であり、268 名（回答率 72%）から回答が得られた。

医学部卒業後、想定している将来の職種（複数回答可）は、専門医が 236 名（68.8%）と最も多く、次いで総合診療医 70 名（20.4%）、公務員 18 名（5.2%）、大学教員 11 名（3.2%）となり、多くは臨床医を希望していた。

本研究科では、卒後臨床研修と同時に大学院博士課程の開始が可能な制度として ART プログラムを運用しており、本学医学部医学科学生は Pre-ART 生（科目等履修生）として、大学院博士課程の講義を早期履修することができる。この制度に登録している学生は 49 名（18.3%）であった。

今後の進路としては、まず初期研修を考える学生が 256 名（95.5%）と全体を占め、ART プログラムにより進学し、研修・研究を両立したいと回答した学生は９名（3.4%）であった。卒業後に研修を受けたい研修施設（複数回答可）は、岡山県内又は中四国地域などの関連病院が 186 名（52.1%）と最も多く、出身地周辺の病院が 104 名（29.1%）、岡山大学病院又は ART プログラム対象病院である岡山市民病院が 13 名（3.6%）となった。

初期研修修了後の進路として、大学院進学に興味を持つ学生は 186 名（72.7%）であり、「必要性を感じたら入学したい」と回答した学生が最も多く 131 名（51.2%）、研修中又は研修修了後に入学を希望する学生が 33 名（12.9%）、専門医取得後に希望する学生が 22 名（8.6%）であった。大学院への進学を希望する者のうち、本研究科への進学を希望する学生は 137 名（70.3%）であった。大学院進学を希望するにあたって最も多かった理由（複数回答可）は、「将来のキャリアに有利であること」108 名（41.9%）で、次いで「生活上の利便性や経済的事由」73 名（28.3%）、「研究内容に興味がある」32 名（12.4%）、「研究室に気心を知った先輩や先生がいる」23 名（8.9%）となった。以上のことから、岡山大学医学部医学科を卒業し、岡山大学病院を含む中四国地域の病院での研修が修了した後、本研究科に入学することを考えている学生は相当数いることが示され、自身のキャリアプランを明確化でき、研究への興味が高い学生の入学が見込まれることが分かった。

医歯科学専攻学生（全学年）に対して行った調査結果を資料５に示す。対象となる学生は 40 名であり、40 名（回答率 100%）から回答が得られた。医歯科学専攻修了後、想定している将来の職種(複数回答可)は、企業の研究職・開発職・営業職・総合職が 26 名(46.4%)と最も多く、次いで病院や施設の医療職が 15 名（26.8%）、大学教員が 11 名（19.6%）となった。今後の進路としては、就職希望の学生が 21 名（52.5%）と半数を占めているが、

博士課程進学希望の学生は 14 名（35.0%）おり、そのうち、本研究科への入学を希望する学生は 12 名（85.7%）と多い。また、博士課程進学の理由（複数回答可）としては、「将来のキャリアに有利」11 名（29.7%）、「今の研究テーマを継続したい／研究内容に興味がある」９名（24.3%）であったことから、研究に対する熱意があり自身のキャリアについて明確なビジョンを持つ優秀な学生を獲得できる見込みがあることが考えられた。

初期研修・後期研修医に対して行った調査結果を資料６に示す。対象となる医師は 143 名であり、118 名（回答率 82.5%）から回答が得られた。将来の職種（複数回答可）については、専門医 105 名（80.2%）、総合診療医 15 名（11.5%）、大学教員 8 名（6.1%）の順であった。岡山大学医学部医学科に在籍当時、Pre-ART 生（科目等履修生）に登録していた 32 名（27.1%）で、本研究科への進学を希望していた者又は既に入学している者が含まれる。研修修了後の進路として、「まずは研修を終えたい」と回答した者が 87 名(73.7%)と多いが、修了後は「一定の経験を積んだ後に必要性を感じれば」55 名（46.6%）及び「勤務先より求められれば」12 名（10.2%）と多数を占めた。進学を希望する理由(複数回答可)としては、「将来のキャリアに有利」44 名（56.4%）が多数を占めた。既に進学を考えている者 21 名（17.8%）のうち、17 名（81.0%）は本研究科を希望しており、進学を考える理由としては、「将来のキャリアに有利」がもっとも高かった。このことから、キャリア志向の高い臨床医を獲得できる見込みがあることが示された。

岡山県内及び中四国地域の岡山大学病院関連病院へ向けて、本研究科の修了生に対して期待する能力や修了生の採用意向、また就労済みの職員・社員の入学意向などについてのアンケート調査を実施した結果を資料７に示す。回答が得られた 104 施設によると、就労済みの職員・社員の入学については「積極的に勧める」41 施設（39.4%）及び「ある程度勧める」42 施設（40.4%）を合わせると、83 施設（79.8%）と多くの施設から賛同を得ており、社会人大学院生の入学も一定数が見込まれことから、研修が修了した者においても応募者が見込まれる。

以上により、医歯科学専攻からの進学者が毎年６名程度、初期研修・後期研修修了後の進学者とともに地域の関連病院から毎年 80 名程度、その他、外国人留学生が毎年 15 名程度入学しており、定員（90 名）の充足が見込まれる。

過去５年間（2017～2021 年）における推移を考慮しても、それぞれ 110 名（122.2%）、114 名（126.7%）、108 名（120.0%）、99 名（110.0%）、99 名（110.0%）であり、医学系の定員数 90 名を上回る入学者数を過去５年間にわたり獲得(平均 117.8%)しており、安定して入学定員数を超える学生数を獲得できている。（資料１）

総括すると、医学学位プログラムの定員（90 名）は、今後も継続的な充足が充分見込まれる。

② 歯学学位プログラム

基礎学部となる歯学部生に対して、卒後研修を受けたい研修施設、進学したい大学院、進路相談についてのアンケート調査を実施した。歯学部生の内訳は、１年次 48 名、２年次 55 名、３年次 50 名、４年次 52 名、５年次 56 名、６年次 53 名であった。アンケート結果を資料９に示す。対象となる学生は 315 名であり、307 名（97.5%）から回答が得られた。

将来の職種については（複数回答可）、プライマリーケア歯科医（一般歯科医）が 246 名（55.9%）で最も多く、次いで臨床専門歯科医 118 名（26.8%）、研究者 43 名（9.8%）、公務員 19 名（4.3%）、そして大学教員 14 名（3.2%）の順であった。臨床専門歯科医の領域では、口腔外科 52 名、矯正歯科 29 名、歯周科９名の順であった。

歯学部卒業後に研修を受けたい研修施設は（複数回答可）、大学病院が 222 名（67.3%）と最も多く、出身地周辺の研修施設の 123 名（37.3%）、岡山県内又は中四国地域などの研修施設の 108 名（32.7%）や有名研修施設の 71 名（21.5%）を大きく上回った。

大学院進学については 229 名（74.6%）の者が考えており、その中の 49 名（21.4%）が研修開始と同時に、また、57 名（24.9%）が研修修了後に入学することを希望し、また、136 名（59.4%）は本研究科に進学することを考えていた。１学年平均 23 名が本研究科に入学することを希望していることになる。

大学院を選択する理由としては（複数回答可）、「キャリアに有利だから」という回答が 106 名（32.9%）で最も多く、次いで「生活面の理由から」62 名（19.3%）、「研究内容に興味がある」47 名（14.6%）の順であった。

これまでを総括すると、岡山大学歯学部を卒業後、岡山大学病院で研修を受け、その後本研究科に入学することを考えている学生は、過半数であることが示され、定員充足の見込みは十分にあると考えられる。

社会人の医歯薬学総合研究科の教育・研究に関する興味を調査するため、2021 年度に卒後５年以内の歯学部歯学科既卒者 207 名を対象に、進路や大学院に対する考えについてのアンケート調査を実施した。アンケート結果を資料 10 に示す。53 名（25.6%）から回答が得られた。

将来の職種については（複数回答可）、臨床専門歯科医が 41 名（58.6%）で最も多く、次いで、プライマリーケア歯科医（一般歯科医）13 名（18.6%）、研究者８名（11.4%）、大学教員５名（7.1%）、そして公務員２名（2.9%）の順であった。臨床専門歯科医の領域では、口腔外科（12 名）、一般歯科（８名）、補綴歯科（６名）の順であった。

現在初期研修中又は後期研修中の 15 名においては、研修修了後に大学院進学を希望する者は、約３分の２に相当する 10 名（66.7%）であった。また、全体でも回答者 53 名の過半数となる 32 名（60.4%）が大学院進学を考えている又は興味を持っていた。次に大学院進学を考えている者では、32 名中 11 名が岡山大学大学院医歯薬学総合研究科への進学を視野に入れていた。歯学科の定員は 53 名であることから、毎年 11 名程度ということになり、既卒者、特に研修を既に終えている者でも応募の見込みはあると考えられる。

以上は岡山大学歯学部の在籍者と卒業生の状況であるが、他大学出身者は毎年８～20 名（2018 年 11 名、2019 年 10 名、2020 年 20 名、2021 年８名）が歯学系に入学していること、留学生は毎年５～９名（2018 年５名、2019 年６名、2020 年８名、2021 年９名）が入学していることなどから、毎年 32 名を確保することができる見込みである。

過去の入学者数に視野を移すと、2017 年から 2021 年までは、それぞれ 35 名（109.4%）、31 名（96.9%）、26 名（81.3%）、44 名（137.5%）、22 名（68.8%）であり、歯学系の定数を 32 名と考えた場合、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を大きく受けた 2021 年を除くと平均 106.3%で、定員を充足できることを示している。なお、2022 年入学の入試においては、歯学系分野の志願者については 39 名（121.9%）と回復しており、入試状況の観点も優秀な学生を毎年確保し、歯学学位プログラムの定員（32 名）の継続的な充足が見込まれる。（資料１）

③　薬学学位プログラム

薬学学位プログラムに求める教育・研究内容や入学意向を調査する目的で、薬学部薬学科及び大学院医歯薬学総合研究科博士課程（薬学系）に在籍する学生 186 名並びに過去５年間の薬学部薬学科卒業生 215 名に対してアンケートを実施した。その結果、在学生 158 名（回答率 84.9%）及び卒業生 56 名（回答率 26.0%）から回答を得た。（資料 13）

将来の職種（卒業生については現在従事している職種）については（複数回答可）、薬剤師（病院・調剤薬局・ドラッグストア）と回答したものが 271 名（71.5%）と最も多く、次いで製薬企業（研究職・CRO を含む開発職・その他の職種）が 67 名（17.7%）、公務員 18 名（4.7%）、公的研究機関の研究者 11 名（2.9%）、大学教員９名（2.4%）の順であった。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程への進学を希望する現役生は 13 名（8.2%）であり、その理由（複数回答可）として「研究に興味がある、今やっている研究が面白い」を挙げた学生が８名（28.6%）と最も多く、次いで「キャリアアップのため」５名（17.9%）、「博士号が欲しい」４名（14.3%）の順となった。すなわち、研究志向が高く、自身のキャリアパスを明確に描けている学生の入学が見込まれる結果となった。薬学部薬学科の定員は 40 名であり、アンケートの結果からは、毎年４名程度の内部進学者が見込まれる。

さらに、卒業生の中で岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程に進学した実績は５名（8.9%）であった。また、薬学学位プログラム修了生に関連が深いと考えられる病院、調剤薬局、製薬企業等に対し、就労済みの職員・社員の入学意向などについてアンケート調査を実施した結果では、学位プログラムの教育課程を修了した者に対し、「興味がある」(87%)と前向きな回答が得られたことなどから、内部進学者のみならず、社会人大学院生の入学も一定程度の増加が見込まれる。（資料 14・15）

入学者に視野を移すと、2017 年から 2021 年までの入学者はそれぞれ０名、３名、２名、１名、４名であった。なお、2022 年入学の入試においては、薬学系分野の志願者は５名であり、ここ数年増加傾向が認められる。入学者に占める内部進学者の割合は概ね 50%であり、直近３年の平均で２名程度は外部（社会人学生）から入学している。（資料１）

総括すると、薬学学位プログラムの定員（６名）の継続的な充足が見込まれる。

３）学生納付金の設定の考え方

学生納付金は、「国立大学等の授業料その他の費用に関する省令（平成 16 年文部科学省令第 16 号）」に定める「標準額」を適用し、次のとおり設定する。

入学料　282,000 円
授業料　535,800 円／年
検定料　30,000 円

（２）学生確保に向けた具体的な取組状況（予定を含む。）

大学院医歯薬学総合研究科（博士課程）４専攻においては、入学者確保に向け様々な学生募集活動を行っている。医療職からのリカレント学生、基礎学部である医学部・歯学部・薬学部からの進学者、他学部からの進学者に加えて、医歯科学専攻（修士課程）からの進学者、岡山大学・中国東北部大学院留学交流プログラム(O-NECUS)による医歯科学専攻特別聴講学生から進学する Post-O-NECUS 留学生、協定校を含めた海外大学からの外国人留学生に訴求することを念頭に、学生の確保に向けた取組を実施してきた。専攻の設置（大括り化）が認められた場合、特色ある学位プログラム・サブプログラムを訴求ポイントとして、次のような学生確保の取組を、これまで以上に強力に行う予定である。

１）各学位プログラムの取組

①　医学学位プログラムの取組

医学学位プログラムの学生募集とキャリア支援については、医学系講座が担当する。学務委員会医学系部会が広報・募集活動について企画し、医学系会議（教授会代議員会）で審議の後、医学系部会委員が学務課大学院担当職員と協力して実行する。

イ．医療職への訴求によるリカレント学生の獲得活動

医学系診療科が独自に持つホームページにおいて、リカレント教育について詳細を案内する。具体的には各診療科における最先端の診断技術や、研究科における成果がどのように応用されるかを理解できるように紹介する。今日、日々の診療業務にあたり、大学院で博士号を取得するメリットを感じないという医師が多いという現状であるため、各診療科への入局や研修を受ける際に、キャリア形成や自分に必要な知識や経験などを、今一度熟考する機会を提供し、学び直すという選択肢を提示する。さらに、在学中の基本的な生活モデルを可視化させ、修了後のキャリアプランなど明示することで、大学院進学への不安を払拭するよう、学務委員会医学系部会と学務課大学院担当を中心として相談窓口を設け大学院入学を促す。岡山大学病院に所属しない者については、岡山県医師会や関連病院、岡山大学医学部同窓会である鶴翔会での案内を通じて、リカレント学生の獲得に努める。講義に関しては、社会人大学院生が受講しやすいようにオンライン講義の充実化が進んでおり、夜間・休日での研究活動にも対応できるよう教員への協力を求めている。

ロ．基礎学部である医学部生への訴求による進学者の獲得活動

医学部医学科のカリキュラムとして、３年次に研究室へ配属され、医学研究を体験できる医学研究インターンシップ（MRI）がある。配属先は、学内・国内・海外研究室と多岐にわたり、３ヶ月間研究活動に専念する。早期より医学研究に触れることで研究の魅力を感じてもらい、リサーチマインドの育成貢献によって大学院進学志望者の増加を図っている。その他、ART プログラム（Advanced Research Training program）を運用し人材確保を進めている。本プログラムは、卒後臨床研修と同時に大学院博士課程スタートが可能なコースであり、医学部―卒後臨床研修―大学院のシームレス化に寄与している。大学院講義の先取り履修ができるシステム（Pre-ART：履修費用免除）に加え、通常よりも２年早い博士号の取得が可能となる。その他、早期修了制度、ART プログラム奨学金制度（入学年度に限り 50 万円を貸与、学位取得後の２年間に返還する）、2009 年度に大学院教育改革プログラムとして採択されて以降、医学研究者育成のために 2021 年度までに合計 91 人の入学者を獲得してきた。ART プログラムについては、医学部医学科オリエンテーションの際に周知しており、医学科３年次から本研究科の Pre-ART 生（科目等履修生）として、2021 年度までに延べ 644 人が博士課程の授業科目を先取りで履修するとともに、一部の学生は研究活動を学部在学中から開始している。その他、NPO 法人岡山医師研修支援機構とともに医学部生に向けて、既に第一線で活躍する方々のメッセージや、大学院進学を視野に入れたキャリア設計を促す情報提供を行っている。また、医学部志望者に向けたパンフレットに卒後キャリアパスを掲載し、進路として臨床医以外にも医学研究者や行政官という選択肢があることを図示することで、大学院での教育の重要性を強調している。

ハ．他学部生への訴求による進学者の獲得活動

他学部生からの進学者の多くは、医歯科学専攻（修士課程）の学生である。そのため、同専攻修士募集説明会で博士課程進学について広報しており、博士課程学生の協力を

得て進学することの利点やキャリアパスについて情報提供を行い、早期より進学という選択肢を提示している。また、同専攻修士課程学生についても、岡山大学科学技術イノベーション創出フェローシップ事業キャリア支援の一環として、多くの企業を招き質疑応答を交えたガイダンスを実施し、企業における博士人材の必要性を明示している。学費の負担などに対する経済的な支援（授業料免除、日本学生支援機構奨学金、日本学術振興会特別研究員、公益財団法人　大本育英会、岡山大学科学技術イノベーション創出フェローシップ）の情報についても、説明会やオリエンテーション等で随時提供する。

②　歯学学位プログラムの取組み

歯学学位プログラムの学生募集とキャリア支援については、歯学系講座が担当する。学務委員会歯学系部会が広報・募集活動について企画し、歯学系会議（教授会代議員会）で審議の後、歯学系部会委員が学務課大学院担当職員及び学務課歯学部担当職員と協力して実行する。

イ．医療職への訴求によるリカレント学生の獲得活動

2019 年度から、大学院におけるリカレント教育の潜在的対象者である歯科医師を中心とした医療職の方を対象として、社会人大学院生として進学する道筋となることを意図した歯学部主催の公開セミナーを開始した。結果は好評であり、受講者数は年々増加している。当初は対面形式のセミナーであったため、参加者は近隣に在住している者がほとんどであった。2020 年度はコロナ禍のためにリモート開催となったこともあり、遠隔地の受講者が増加し、受講希望者は広範囲にわたって存在していることが判明した。この実績に基づき、改組後は歯学部と歯学系講座が主体となって公開セミナーによる広報活動を行う予定である。岡山県下及び周辺地域については、地域歯科医師会等を通じて、また、全国については岡山大学歯学部同窓会等を通じて、リカレント教育を必要としている方へ公開セミナーの開催を周知・広報する。歯科領域の最先端の診療や歯学領域を中心とした最先端の研究内容の紹介を含めた内容とすることで、潜在的入学志望者に直接訴求する予定である。今後は、模擬講義に加え模擬実習・演習を入れることで、大学院進学への興味を強く持たせて入学を促す。さらに、社会人大学院生としての大学院生活のシミュレーション例をウエブサイト等に提示し、学務委員会歯学系部会のキャリア支援委員と学務課大学院担当事務職員による相談窓口を設けることで、大学院進学の不安を払拭する。

歯学学位プログラムの授業科目編成においては、社会人大学院生が履修しやすいように、休日における授業の開講や、オンデマンド方式のリモート授業の一層の充実を図る。

ロ．基礎学部である歯学部生への訴求による進学者の獲得活動

歯学部受験者の中には、大学院進学に興味を持ちながらも、その教育研究内容について周知が不足しており、進学をためらう学生が少なからずいる。このことは、教員にとっても受験者本人にとっても有益ではない。歯学部志願者に大学院の教育研究を正確に紹介することが重要であり、歯学部志願者用パンフレットに、大学院の教育研究についての記載を始めた。学生募集説明会などの機会を捉えて、歯学部志願者への広報活動をさらに拡充する予定である。

歯学部卒業後、大半の卒業生は初期研修を行い、一部の者が大学院へ進学しているのが現状である。初期研修中は専念義務があるため、多くの者は歯学部－初期研修－大学院の期間が完全に独立した形になっており、初期研修後の大学院進学率は必ずしも十分ではなかった。歯学部－初期研修－大学院をシームレス化することで、大学院進学者の割合は増加すると考えられる。そこで、歯学部高学年を対象とした選択科目及びキャリア支援活動として教育研究分野での研究活動に携わることで、リサーチマインドを熟成させ、初期研修修了後、スムーズに大学院生活に移行できるよう導く予定である。

歯学部歯学科では、これまで５年生と６年生を対象としたキャリアパス説明会を実施してきた。しかし、歯学科の低中学年では、大学院進学を含めて将来のキャリア設計を考えている学生が少ないのが現状である。この状況に対応するには早い時期からキャリアパスについての情報提供が必要と考え、2020 年度から２年生を対象としたキャリアパス説明会を開始した。低中学年においても発達段階に適した内容のキャリアパス説明会を実施することで、大学院進学の魅力や必要性などを十分に伝えている。今後も継続して充実を図る予定である。

ハ．他学部生への訴求による進学者の獲得活動

４年制学士課程の他学部出身者が博士課程に進学するためには、修士課程を修了していることが求められる。そのため、医歯科学専攻（修士課程）進学についても学生募集説明会等で広報する。希望者については、希望する教育研究分野で研究の模擬体験（「研究インターンシップ））を実施する予定である。

③　薬学学位プログラムの取組

薬学学位プログラムの学生募集とキャリア支援については、薬学系講座が担当する。学務委員会薬学系部会が広報・募集活動について企画し、薬学系会議（教授会代議員会）で審議の後、薬学系部会委員が学務課大学院担当職員と協力して実行する。

イ．医療職への訴求によるリカレント学生の獲得活動

学位プログラム化に伴い、病院薬剤部を含む医学系教員と協働して、社会要請に対応したデータサイエンス系科目を実施する。さらに、データサイエンスを専門とする臨床実務家（薬剤師）教員が主宰する教育研究分野を設定し、病院薬剤部との連携体制を強化することにより、リカレント学生の獲得に努める。

ロ．基礎学部である薬学部生への訴求による進学者の獲得活動

薬学部薬学科のアドミッション・ポリシーでは、「大学院進学後、薬学関連分野の研究者や教育者を目指したいと考えている人」を求める旨をうたっており、特に総合型選抜では研究志向性の高い学生を選抜できるような選抜を行っている。

教育課程では、３年次後半からの研究室配属前に、研究活動を経験できる授業科目も設定し、研究志向を涵養する取組も行っており、これを継続・発展させる。さらに学位プログラム化に伴い、社会要請に基づくデータサイエンス系科目を設定・充実させる。

学生支援では、大学院に進学しない理由として「メリットやキャリアプランの不透明性」を訴える学生が多かったことから、オリエンテーション等での説明を複数回実施する。これらの取組により、進学者の獲得に努める。

ハ．海外協定校への訴求による教員留学生の獲得活動

海外協定校であるハイフォン医科薬科大学（ベトナム）から教員を定期的に大学院に受け入れており、加えて同国のバンメトート大学とも協定締結に向けた協議や現地視察を実施済みである。これらの国際交流及び留学候補者選定のマッチング活動を継続することで、留学生の獲得に努める。

２）医歯科学専攻（修士課程）との接続

医歯科学専攻のキャリア支援活動と、O-NECUS 特別聴講学生への訴求による進学者の獲得については、医歯科学専攻（修士課程）の学務委員会が広報・募集活動について企画し、専攻会議で審議の後、学務委員会の下に置かれた学生募集・就職支援推進部会と O-NECUS 担当委員が学務課大学院担当職員と協力して実行している。

① キャリア支援活動を通じた進学者の獲得活動

医歯科学専攻（修士課程）には基礎学部がないため、学生募集・就職支援推進部会が年間３回の学生募集説明会を開催し、在学生・修了生（就職者と進学者を含む）と志願者との座談会（あえて教員抜き）の時間を設け、教育研究と生活に加えキャリア形成について体験者の生の声を聴く機会を提供することで、入学前からキャリア形成の重要性を認識させている。

教育課程では、１年次４月～５月のインテンシブ・コースワークのうち、最初に開講される「医歯科学概論」の中で専攻長自らがキャリア形成の重要性を具体的に説明し、主体的な自己分析を始めるよう促している。

学生支援では、学務課大学院担当にキャリアコンサルタント国家資格を持つ事務職員を配置し、静かな環境の専用相談室を設けて、在学生が進学・就職について相談できるよう運用している。さらに、全学教育・学生支援機構高大接続・学生支援センター博士人材キャリア開発セクションの教員と連携して、より専門的な進学・就職支援を行っている。医歯科学専攻（修士課程）から博士課程に進学して、助教に採用された教員が進学者の良いロールモデルになっている。留学生からの相談については、中国語・英語の堪能な学務課大学院担当の事務職員が対応している。加えて、大本育英会給与奨学金が修士課程から博士課程への進学（予定）者等に給付されるなど、博士課程進学に特化した経済的支援が受けられることを広報している。

これらの獲得活動により、医歯科学専攻（修士課程）から博士課程への進学比率は約３割に達している。

② O-NECUS 特別聴講学生への訴求による進学者の獲得活動

岡山大学-中国東北部大学院留学生交流プログラム（O-NECUS プログラム）は、岡山大学と中国東北部５大学（大連医科大学、中国医科大学、東北大学、吉林大学、ハルピン医科大学）との間で開始された共同教育プログラムである。本プログラムでは、優れた人材の育成を共同で行い、大学院学位の国際的通用性、質の保証、国際水準の教育の提供を図るプログラムを構築するために、2008 年度に大学間コンソーシアムを構築し大学間国際交流協定を締結した。現在は、東北師範大学、長春理工大学を加えた７大学と連携教育を行っている。

医歯科学専攻（修士課程）では、特に優秀な医療系部局を有する大連医科大学、中国医科大学、吉林大学、ハルピン医科大学との連携教育プログラムを実施し、連携先大学の修士２年生を１年間程度医歯科学専攻（修士課程）特別聴講学生として受入れて、共同で教

育研究を実施している。本プログラムでは、例年３月にこれらの中国４大学を巡回して志願者の面接試験を行うとともに、スプリング・セミナーとして主に志願者を対象とした教育セミナーとプログラム紹介、各校国際部及び大学執行部との打合せを実施している。さらに、毎年２大学程度を巡回してオータム・セミナーを実施し、本研究科の先端的研究を行っている若手教員を派遣して、現地学生に最先端の研究を紹介するとともに本プログラムの周知を図っている。（なお、2021 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、スプリング・セミナー、オータム・セミナーともオンラインで実施した。オータム・セミナーでは連携各大学から 79 名の参加者があった。）この交流プログラムを活用することで、計 130 名(2008-2021 年)の特別聴講学生を受入れてきた。

2013 年度から、この O-NECUS プログラム修了者から、本研究科博士課程に優れた人材を受入れて育成することにより、本学大学院学位の国際的通用性を高めることを目的とする制度（Post-O-NECUS 博士課程学位取得制度）を運用している。この制度では、O-NECUS プログラム修了者外国人留学生特別入試の合格者には、入学検定料、入学料及び本学在学中の授業料を不徴収とする経済的支援を実施している。O-NECUS プログラム修了者は日本での生活・研究環境に順応しており、本学大学院への進学意識も極めて高い。本制度を特に優秀な進学者の獲得に活用しており、これまでに博士課程大学院学生 40 名（2013-2021 年）を獲得した。

本制度の継続・拡充のため、スプリング・セミナー及びオータム・セミナーの継続的実施、オンライン等を用いた広報活動の充実、特に既に公開している O-NECUS プログラム広報ビデオ（https://www.mdps.okayama-u.ac.jp/about/global/）の拡充や協定校との連携強化により、さらなる O-NECUS 特別聴講学生の獲得と博士課程への進学に繋げる予定である。さらに、受入学生に対する総合的なキャリア支援活動や研究指導教員、修士課程及び博士課程教職員を連携したキャリア支援 FD を実施して、本制度の周知とブラッシュアップを図り、さらなる博士課程進学者の確保を行う予定である。

３）海外大学からの外国人留学生の獲得

①　教育課程と広報の国際化による留学生の獲得活動

本研究科では、海外の入学・卒業の日程に合わせた 10 月入学のシステムを導入している。外国人留学生向けに３種類の入試を設けており、留学生の事情に合わせて入試方法を選択できるようになっている。外国人留学生特別入試は年２回行われ、岡山大学で実施される。O-NECUS プログラム修了者を対象にした O-NECUS プログラム修了者外国人留学生特別入試は年１回行なわれ、入試の検定料、入学料及び本学在学中の授業料について全額不徴収という利点がある。外国人留学生海外特別入試は年１回行なわれ、入学志願者は入学試験のために渡日することなく、日本国外に居住のまま受験することができるという利点を持つ。上記３種の特色ある入試システムにより、留学生が受験しやすい環境を整備しており、今後も留学生獲得に向けて学生募集説明会等で広く周知を行う。

これまでの教育環境として、本研究科では英語で受講できる授業が不足しており、留学生が授業の内容を理解できないという課題があった。この課題を解決すべく、入学した留学生の学修環境向上を目的として、英語による授業数の増加及び英語授業の電子ライブラリー化を推進している。2019 年度から大学院の教養教育科目の授業が英語により受講可能となるよう、英語授業の電子ライブラリー化と留学生用英語資料の充実を含む教育基盤の整備を行っており、2020 年度には日本語・英語授業の基盤が完成した。本年度はさらに英語を用いた授業科目の充実と、教員の資質向上に向け組織的に継続した取組を強化している。具体的には、大学院の教養教育科目を英語授業のみで修了可能となるよう

に、電子ライブラリーを確立しつつある。また、英語授業コンテンツの不足を補うため、人工知能システム（AI）を導入することで、日本語授業に英語字幕を付してオンデマンドで配信することを計画している。上記の取組を既存の大学院学務支援システム POSGRA（大学院生に向けた学務に関する情報や講義動画を視聴できる）に導入・改修することで、スムーズに運用できるように整備を進めている。留学生からの相談については、これまでどおり中国語・英語の堪能な学務課大学院担当の事務職員を配置し対応する。講義を英語で行うためには、教員のグローバル化に資する若手教員の資質向上も必須である。そのため、2019 年度にはフィリピン、サン・カルロス大学での FD 研修を実施し、教員２名を７日間派遣した。現地での授業実施方法を見学し、英語での薬学専門教育授業のノウハウを共有した。現地での実習には学生が授業サポートを行っていることが確認できた。派遣された教員による英語での研究紹介講演会を開催し、派遣教員のスキルアップに有効であった。2020 年度からコロナ禍の影響で海外派遣が困難となったが、FD 研修の発展・拡張のために Web システムを構築し、複数大学間での授業視察から英語での教育方法のスキルアップ研修を行い若手のグローバル化資質向上にはたらくよう計画している。さらに、海外協定大学に向けたオンライン授業やジョイントセミナーの開催、撮像データのライブラリー化を検討し、岡山大学の海外大学への影響力を拡大させ、将来的にはジョイント・ディグリーの運用も視野に入れた展開をし、さらなる留学生の獲得を狙う。

留学生にとって日本での生活は不慣れなことが多々あると思われるが、そのような事柄に対処するため、本学学生によるチューター制度を設けて、個人間でのよりきめ細やかなフォローを行っている。本学は外国人留学生のための宿泊施設を有し、生活に必要な設備が整えられた部屋を低価格で利用できる。大学生協が運営する岡山大学生協食堂ではハラルフードの提供もあり、各国の習慣に配慮したグローバル化への対応も滞りない。留学生に向けたキャリア支援については、大学ホームページ上で日本学生支援機構が広報している外国人留学生のための就活ガイドを案内している。本教育課程で学位を取得し帰国した留学生には、国際的な友好の架け橋としての役割を期待している。そのため積極的に卒後フォローアップを実施する。具体的には、母国に帰国した留学生の動向調査を行っている。留学生の必要とする情報を迅速に提供し、国際的な新規共同研究としての展開及び留学生のキャリアアップを図る。実際に、本課程を修了した留学生との共同研究の実績を有しており、北アイルランド・クイーンズ大学やパラグアイ・アスンシオン国立大学といった国際色豊かな大学の PI というキャリアを得た学生がおり、留学生の紹介や、医学研究インターンシップ派遣先として、医学部生への医学研究教育にも貢献し、グローバルに友好的で持続可能な発展を遂げているため、今後も調査活動を継続する。

広報の国際化には URA 執務室という部署が寄与している。当部署は主に岡山大学における研究活動の企画や研究成果の活用促進などを管理しており、アウトリーチ活動として、アメリカ科学振興協会が運営するプレスリリース配信プラットフォーム「EurelAlert!」を活用し、岡山大学の研究成果や知的財産活動などを英語で発信している。上記に加え、岡山大学の強みである医療系分野の魅力的な研究を世界へ向けて紹介する「OU-MRU」という Web レターを刊行し、大学院医歯薬学総合研究科に関する情報発信のさらなる強化と国際的知名度の向上を推進している。

② 国際交流協定の締結、国際交流活動（特にミャンマー、インドネシア、ベトナム等）、日本学術振興会 各種事業（外国人特別研究員等）への応募等のアウトリーチ活動による留学生の獲得活動

本学は海外大学 181 校、本研究科は海外大学 11 校との国際交流協定を結んでいる。特筆すべきは、ミャンマー保健省食品薬品行政局（MFDA）との協定である。同国国民の保健・医療向上のために MFDA 若手職員の博士学位の取得支援を推進しており、奨学金の獲得などの修学支援を行っている。2016 年度の１名に加え、2017 年度には２名の MFDA 職員を留学生として獲得した実績を持つ。本活動は岡山大学の SDGs の達成に貢献する活動として認められており、今後より多くの学生獲得に向けて働きかける予定である。その他ベトナム、中国には事務所を創設し、海外における岡山大学の広報拠点として機能している。特に中国事務所は前述の O-NECUS プログラムの拠点として活動をしている。広報だけではなく優秀な外国人留学生の養成や人材の獲得を推進しており、これまでで 40 人（2013-2021 年）の博士課程学生を獲得している。国際交流活動としては、屋根瓦方式による持続的な医療系高度人材の育成に取り組んでいる。具体的には、ミャンマーやインドネシアの大学教員を大学院留学生、学部学生を特別聴講生として受け入れ、教員留学生は自身の研究を行いつつ、学部留学生の実習科目をサポートするために日本人大学院生と協力し実習教育を体験する。教員留学生は帰国後に実習教育の指導者となり、自身が経験した体験を下級生に案内し、留学を勧めるという持続可能な留学システムを構築している。本システムにより、これまで８人（ミャンマー：1996-2021 年、インドネシア：2012-2021 年）の博士課程進学者を獲得している。

③　中国赴日本国留学生予備学校における専門日本語教育への協力による国費留学生の獲得活動

中国赴日本国留学生予備学校は、日中両国政府間教育協議により 1979 年に中国吉林省長春市の東北師範大学内に設置された。創立以来、基礎日本語及び専門日本語を担当する教員が我が国から派遣されてきた。岡山大学は 2015 年から専門日本語教育を担当することとなり、大学院医歯薬学総合研究科も医歯薬学領域の専門日本語教育を担当する教員を毎年派遣している。この活動に伴って、国費留学生（博士課程、 大学推薦）のいわゆる赴日枠が付与されている。本研究科では、毎年概ね１～２名分の国費留学生枠を得ており、この枠を活用して博士課程の国費留学生を獲得している。今後もこのような国際貢献活動を通じた留学生の獲得を継続する予定である。

４）経済的支援について

①　岡山大学科学技術イノベーション創出フェローシップ

本学は 2021 年２月に文部科学省補助事業「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」に採択され、本学の「重点研究分野」において研究を推進する若手研究者の養成、ひいては、我が国の科学技術・イノベーション創出を担う研究者の創成を目的に「岡山大学科学技術イノベーション創出フェローシップ（以下「OU フェローシップ」という。）」を創設した。さらに 2021 年９月に「次世代研究者挑戦的研究プログラム」に採択されたことを受けて「OU フェローシップ（以下「タイプＢ」という。）」を新規創設し、既存の OU フェローシップを「OU フェローシップ（以下「タイプＡ」という。）」として実施している。

2022 年度募集においては、タイプＡは博士課程（博士後期課程及び一貫制博士課程３～５年次を含む。以下「博士課程等」という。）への入学（又は進級）予定者を対象に 10 名程度とし、研究専念支援金（年額 180 万円（月 15 万円））及び研究費（年額 60 万円以内）を支給する。また、タイプＢは博士課程等への入学予定者及び標準修業年限以内の在籍者を対象に 10 名程度とし、研究奨励費（年額 180 万円（月 15 万円））、研究費（定

額）（年額 40 万円以内）及び研究費（チャレンジ枠）（フェローシップ対象学生から、自らの国際性、研究力、キャリア意識を高める取組等の提案を受け、年額 70 万円以内を追加配分するもの）を支給する。

ただし、②の大本育英会給与奨学金と併用する場合は、フェローシップ（研究専念支援金又は研究奨励費 180 万円）とを併せて、年間受給額の総額が 240 万円を超えないよう、当該奨学金の額を減額調整する。

医歯薬学総合研究科博士課程では、2021 年 10 月から標準修業年限までの間、タイプＢの受給が決定している者が４名、2022 年４月から原則３年間（標準修業年限以内に限る）でタイプＢの受給を予定している者が３名となっている。

② 大本育英会給与奨学金

公益財団法人大本育英会により、郷土岡山の発展に資するため、歴史と伝統を誇る本学に対して、その大学院に学ぶ学生に返還義務のない奨学金を給付し、特に本学大学院博士課程等への進学を目指す志ある者を支援することにより、広く社会に貢献しうる有為な人材を育成することを目的として、2020 年度に創設され、2021 年度から受給が開始された。

2022 年度新規募集においては、①学部４年次生で、2022 年度に岡山大学の修士課程（博士前期課程及び一貫制博士課程１～２年次を含む。以下「修士課程等」という。）へ進学予定であり、将来、岡山大学の博士課程等への進学を決意している者、②修士課程等２年次生で 2022 年度に岡山大学の博士課程等への進学を予定している者、③博士課程等１年次生で岡山大学以外の修士課程等から入学した者、④本研究科博士課程の１年次生のいずれかに該当し、本人の所得が 340 万円以下の日本国籍を有する者を対象に 80 名を募集し、①に該当する者は修士課程等の１年次及び２年次の２年間で年額 120 万円を、②に該当する者は博士課程等の１年次から３年次（５年一貫制博士課程は３年次から５年次）の３年間で年額 120 万円を、③に該当する者は博士課程等２年次から３年次の２年間で年額 120 万円を、④に該当する者は博士課程２年次から４年次の３年間で年額 120 万円を支給する。

2022 年度の受給者は募集中であるが、2021 年度には医歯薬学総合研究科博士課程関係では、博士課程在籍者 13 名、進学予定者（本研究科修士課程在籍者）２名が受給している。

③ 先進医学修練プログラム（Advanced Research Training（ART)プログラム）奨学生

本研究科独自のキャリアパスプログラムである先進医学修練(ART)プログラムは、“学部と大学院をシームレスに連結し、研究医とリサーチマインドを有した臨床医を育てる”ことを目的に、卒後臨床研修１年目から大学院博士課程への入学を可能にした教育研修プログラムである。

医学部医学科卒業後すぐに博士課程に進学する ART 大学院生の修学を経済的に支援するため、一般財団法人積善会の教育研究助成事業による寄附を受け、ART プログラム奨学金制度を設けている。博士課程入学時に 50 万円を貸与し、学位取得後２年間で返還する奨学制度である。

２．人材需要の動向等社会の要請

（１）人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）

大学院医歯薬学総合研究科医歯薬学専攻（博士課程）は、医学・歯学・薬学の領域で、教育研究、先進的医療の中核拠点として、我が国及び地域に貢献する融合型の医療系大学院である。国際社会において高く評価されると共に地域社会に広く活用される研究成果の創出を基礎として、創造性豊かで優れた能力により自立した国内外機関の研究者、高度な専門知識と豊かな人間性に基づく倫理観を兼ね備えた特色ある医療のプロフェッショナル及び教育・研究・医療分野で人類の叡智を拡げるリーダー的大学教員を養成する。

医学･歯学･薬学は､応用生命科学の一領域として共通の概念と理解に立脚することから、大学院レベルで本領域の教育研究を担う教育研究組織は、大学院医歯薬学総合研究科として既に大括り化されている。また、基礎学部として医学部・歯学部・薬学部の６年制学士課程を擁している。そのため、４年制博士課程では人材養成目的が異なる３つの学位プログラム（医学学位プログラム、歯学学位プログラム、薬学学位プログラム）を編成する。

１）医学学位プログラム

医学学位プログラムでは、医学における幅広い学識と高度な研究能力を有し、地域医療から高度先進医療までを担う高度専門医療人、医学・医療に関する確かな教育研究能力を備えた高等教育教員、創造性豊かで優れた研究・開発能力を持ち学際的・国際的に活躍できる医学・医療分野の研究者などを養成する。

例えば、先進的医療技術を駆使して、がんや難病の治療を行う高度臨床研究医や生命科学の深い理解と洞察に基づき、医療の様々な局面で活躍する高度総合臨床医、医学・生命科学領域で人類の叡智を拡げ社会実装に取り組みつつ後進を養成する大学教員、医学・生命科学関連の国内外研究機関・企業で活躍する研究者などを想定している。

①　医学学位プログラムに設定するサブプログラム

医学領域では、専門性及び進路の面で多様な人材の養成が求められる。また、社会が求める人材像も時代とともに変化していく。このような人材養成の要請に柔軟かつ継続的に応えるため、医学学位プログラムでは、次のような特色ある教育課程を有するサブプログラムを設定する。

イ．包括がん研究者・研究医養成サブプログラム

本サブプログラムでは、学修者の進路変更に柔軟に対応するため、「がん研究者コース」と「がん研究医コース」を設定する。

［がん研究者コース］

大学院医歯薬学総合研究科では、がん基礎研究を推進し、がん研究者の養成や教育の中核拠点として、岡山大学病院と連携を図り、がん予防・診断・治療法の開発を目指した「岡山大学がん研究コンソーシアム」を形成している。本コンソーシアムが主体となって、最新のがん研究に関する統合的理解と、研究推進能力を兼ね備えた人材を養成する。がん病態の理解と治療戦略は時代とともに変化するが、継続的かつ徹底的な議論と、分野を跨いだ人的交流等を重ねることで、これに即応できる行動様式と学修能力を備えた人材を養成する。さらに、この領域の教育研究と医療において、国内外でリーダーシップを発揮できる人材を養成する。

［がん研究医コース］

中国・四国地域に位置する 11 大学及び地域の 35 のがん診療連携拠点病院との広域連携組織による「中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム」が主体となって実施する。

がん患者数の増加やがん治療の進歩に伴い、高齢者がん医療、がんゲノム医療、希少がん、小児／思春期・若年成人(AYA)世代がんへの対応は、新たな重要課題となっている。本コースでは、高いレベルでそれらを理解し、適切な医療を提供できる医療人が必要とされる社会のニーズに応え、これらのがんに関する高度で包括的な知識と技術を持ち、チームで連携してがん診療を提供するため、がん患者の求める全人的医療を実践できる卓越したがん専門医療人を多職種連携教育により養成する。

ロ．グローカル医療人養成サブプログラム

Local な地域医療ニーズに対して、専門性を越えた統合的理解・横断的なアプローチで解決する着眼点・方法論を修得し、Global な視点で問題解決に取り組む姿勢を発展させていくための素養を培うことを教育目的とする。

総合診療学をベースに、感染症学（感染症診断学・感染症治療学・感染制御学・微生物学・分子疫学）に重点を置きながら、地域医療プラクティカムとしての地域医療学（総合診療学・老年医学・予防医学)、医療教育学（医療人教育・社会医学教育・リカレント教育)、東洋医学（漢方診療)、緩和医療、国際診療、ナラティブメディスン（物語能力を用いて実践される医療）など幅広い分野に対応できる多様な人材を養成する。基礎・臨床研究を問わず、研究手法は量的・質的研究を含む。また、海外留学生の受け入れを含め、海外文化との積極的な交流を図ることで、国際的な感覚を身に付けた国際医療人の輩出を目指す。

ハ．メディカルデータサイエンスイノベーター(MDS) 養成サブプログラム

保健医療分野における研究デザインとデータ収集・解析により、人間集団が織りなす事象を幅広く教育研究の対象とした「ビッグデータ解析コース」と、収集されたデータから AI 技術を応用して、価値の創出を目指す「医療 AI 応用コース」からなるサブプログラムである。本学術領域の汎用性と専門性に配慮しつつ、学生の進路変更にも柔軟に対応するため、相互に関連する領域を戦略的に包括している。

［ビッグデータ解析コース］

保健医療分野でのデータサイエンスに関する総合的理解と、研究推進能力を備えた人材を養成する。医学部以外の分野出身者にも門戸を開き、保健医療分野での学びを通してデータサイエンス研究の発展に貢献できる人材を養成する。この領域の教育研究と医療応用において、国内外でリーダーシップを発揮できる人材を養成する。

［医療 AI 応用コース］

文部科学省「先進的医療イノベーション人材養成事業保健医療分野」における、AI 研究開発加速に向けた人材養成産学協働プロジェクトにおいて、「Global×Local な医療課題解決を目指した最先端 AI 研究開発」人材教育拠点（主管校：東北大学、連携校：本学及び北海道大学）を基軸として展開する。

既存学術領域を越えた、学際的機能連携を通した革新的医療研究開発の創出のため、その基盤として、医療場面で収集されたデータから AI 技術を応用した価値の創出ができる人材を養成する。医療 AI に関する包括的で学際的な理解力と、医療課題解決につながる実践力を兼ね備え、AI 技術を医療分野において実践することで新しい価値を生み出し、適切な医療提供に貢献できる医療人を養成する。

２）歯学学位プログラム

歯学学位プログラムでは、歯学における幅広い学識と高度な研究能力を有し、地域医療から高度先進医療までを担う高度専門医療人、歯科医学・歯科医療に関する確かな教育研究能力を備えた大学教員、創造性豊かで優れた研究・開発能力を持ち学際的・国際的に活躍できる歯学・歯科医療分野の研究者などを養成する。

例えば、生命科学の深い理解と洞察に基づき、歯科医療の様々な局面で活躍する総合臨床歯科医や、リサーチマインドを持ち先進的歯科医療技術を駆使した治療を行う高度臨床専門歯科医、歯科医学・生命科学領域で人類の叡智を拡げ社会実装に取り組みつつ、後進を養成する大学教員、歯科医学・生命科学関連の国内外研究機関・企業で活躍する研究者などを想定している。

①　歯学学位プログラムに設定するサブプログラム

歯学領域では、専門性及び進路の面で多様な人材の養成が求められる。また、社会が求める人材像も時代とともに変化していく。このような人材養成の要請に柔軟かつ継続的に応えるため、歯学学位プログラムでは次のような特色ある教育課程を有するサブプログラムを設定する。

イ．ボーダレス歯学研究者養成サブプログラム

歯科医学における幅広い学識に支えられた、高度な先見性と研究能力を有し、学際的・国際的、すなわちボーダレスに活躍し地球規模での歯科医学の発展を導くことのできる教育者・研究者を養成する。また、社会の要請に応え持続可能な人間社会の構築に貢献するため、先進的歯科医療技術の開発・応用を担うことのできる先端医療人を養成する。

３）薬学学位プログラム

薬学学位プログラムでは、薬学・薬物治療学及び関連分野を先導し、広く人類の健康に貢献する国際水準の研究と教育を推進している。これらの研究・教育活動を通じて、深い学識と高度な専門性、さらには社会をリードする行動力と、自ら成長し続ける意欲を備えた薬学研究者や大学教員、高度先導的薬剤師や高度専門職業人を養成し、社会の要請に応える。

（２）（１）が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

１）社会的、地域的な人材需要の動向

①　医学学位プログラム

今日の世界的な問題として、近い将来、世界的な人口爆発による貧困や医療・健康面への不安が高まってきている。国連はこれを解決するため、「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」という新しい取組を 2015 年に提案した。このアジェンダには「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)」が 17 項目設定されており、その一つに「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」という医療と健康に関係する項目がある。世界中の様々な機関は、これらの目標達成に向けた独自の取組を実施しており、岡山大学においては、その目的として「人類社会の持続的進化のための新たなパラダイム構築」を掲げ、アジアで初めてユネスコチェアの認定を受け、ESD（持続可能な開発のための教育）を推進してきており、岡山地域や国際社会と一体となって SDGs を推進している。

本学の医歯薬学総合研究科博士課程は、医学研究科から通算して創立 68 周年を迎え、医学系においては、これまでに延べ 1,800 人を超える優秀な医師や研究者を含む学位取得者を輩出し、教育・研究・医療の面で社会に貢献してきた。従来、医療系大学院は、医学・医療における特定の専門分野について自立した深い研究を行い得る研究者の養成が求められていた。昨今、日本国内では人口減少と少子高齢化が急速に進み、医療・介護・福祉の需要が増加している。我が国の疾病構造を調査すると、感染症や遺伝性疾患等の単一標的型の疾患のみならず、生活習慣病や老化に伴うがんを含む多因子疾患への推移が進んでいる。平均寿命が延伸している中、健康寿命をさらに伸ばしていくには、このような疾患に対する早期診断・予防・治療技術の向上が課題となる。我が国は今後取り組むべきモダリティとして、医薬品、医療機器・ヘルスケア、再生・細胞医療・遺伝子治療、ゲノム・データ基盤の４つの領域に関する研究を支える事業に乗り出した。さらには「第三期がん対策推進基本計画」を打ち立て、がん予防・がん医療の充実・がんとの共生に向けた施策を推進している。こうした状況下で、医学分野における基礎研究や診断技術、治療技術は目まぐるしい進歩を遂げており、上記の計画を支える基盤として、今日の医療に携わる者には常に新しい知識を取り入れる探究心と、先進的医療技術を駆使した診断力・治療技術力が求められている。そのため、医療系大学院では、高度な専門性及び業務遂行にあたり生じた疑問を、リサーチクエスチョンに繋げるという研究マインドを有し、新規に得られた結果を「社会実装」に展開できる能力を持つ研究者・医師の育成が必須とされる。とりわけ、今日では世界的にもがんゲノム医療が推進されており、医療ビッグデータの解析や AI の活用が期待されている。海外では社会実装が進んでいるが、我が国においては情報不足・AI を理解する医療人材不足という課題がある。未来の医療を作る人材として、これらを取り扱うことに熟練した医療人の育成が求められる。

本学が所在する岡山県も少子高齢化に伴う社会構造の変化に対応するべく、「第２次健康おかやま 21」という計画を実施している。全ての県民が健康で生きる喜びを感じられる長寿社会の実現という理念の下に、平均寿命の延伸を上回る健康寿命の延伸を目指している。その実現には、医療人ひとりひとりが病気を正しく理解し、地域の課題を俯瞰的に捉え、最先端の治療や診断技術を効果的に活用し、解決に向けた行動力を持つことが求められている。特筆すべきは、本研究科は岡山県より寄附を受けた「地域医療人材育成講座」を有しており、地域医療の向上を担う未来の医療人の養成を期待されている。岡山大学はスーパーグローバル大学、革新的医療技術創出拠点に選定され、岡山大学病院はがんゲノム医療中核拠点病院、臨床研究中核病院として認定を受けており、本研究科が目指す人材養成を支えるシステムとして機能する。

以上のように、本研究科で養成する人材は社会的・地域的な需要を踏まえたものであると考える。

②　歯学学位プログラム

歯学学位プログラムの基礎学部となる岡山大学歯学部は、1979 年に国内で最後に設置された歯学部である。既に 40 年を過ぎ、これまでに、歯学部と大学院医歯薬学総合研究科の前身となる大学院歯学総合研究科、大学院医歯学総合研究科及び現大学院医歯薬学総合研究科（歯学系）では、優秀な人材を中国・四国地域とともに隣接する近畿地方に多く輩出してきた。近畿地方に歯学部は２校にしかなく、人口を鑑みると岡山大学歯学部の存在は大きい。

歯学部と大学院医歯薬学総合研究科（歯学系）では口腔感染症と全身疾患、加齢や各種疾患による摂食・嚥下・発音機能低下、口腔運動疾患、口腔領域のがん、小児・希少疾患、難病等に関する診療と研究を通じて、歯科医療の向上に貢献するとともに、医科歯科連携による診療を推進し、岡山県等における地域歯科医療の中核的役割を果たしてきた。特に周術期を中心とした医科歯科連携による診療は、全国でも先進的な取組として注目を浴びてきた。一方、地域の歯科医師会と協定を結び、地域歯科医療に積極的に取り組んできた。

また、超高齢社会における医療現場や、地域社会の福祉につながる歯科医療及び国民の保健衛生に貢献するため、研究マインドを持つ臨床歯科医師、国際的な研究者及び教育者の養成を積極的に推進してきた。2014 年には課題解決型高度医療人材養成プログラムに「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革」事業が選定された。岡山大学は主管校となり全国の 10 大学とともにこの事業を推進し、最終評価 S を獲得した。各校と連携した教育活動事業は現在も継続中である。

大学院医歯薬学総合研究科（歯学系）では、研究マインドを持った高度専門人材を養成するため、疫学研究や基礎研究を組み合わせた臨床専門医コースの開設や全国公募型臨床研究デザインワークショップの開催等に積極的に取り組み、全国的な歯科医師の資質向上や国民への普及啓発に貢献してきた。これらの取組は、2007 年文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム医療系大学院高度臨床専門医養成コース」を母体とする。臨床研究デザインワークショップは海外にも移植され、国際臨床研究デザインワークショップとして ASEAN 諸国に展開されている。なお、ASEAN 諸国のニーズに応えるべく、国費外国人留学生を優先配置する特別プログラムである ASEAN 中核医療系大学と連携する「口腔器官再生・再建・統合生物学特別コース」を設けている。

以上のように大学院医歯薬学総合研究科（歯学系）では、地域社会と共に日本のみならず世界で活躍し、これからの社会で必要とされるスキルを身に付けた人材の養成に努めている。

③　薬学学位プログラム

岡山大学は、中国・四国地域において中核をなす大学であり、特に医療系学部及び大学院は常に中国・四国地域の中心的役割を果たしてきた。薬学学位プログラムの基礎学部となる岡山大学薬学部及び前身となる大学院医歯薬学総合研究科博士課程（薬学系）もこれまでに、薬剤師、薬学及び関連分野の企業人・研究者並びに将来を担う教育研究者の養成に重点を置いた教育を実施しており、薬学部及び大学院博士課程（薬学系）から地域の医療機関などに多くの優秀な人材を輩出し、多大なる貢献を成し遂げてきた。

昨今、薬剤師に求められる役割が「モノからヒトへ」と変化してきている。すなわち、薬局薬剤師においては、地域の実情に応じて他職種や医療機関等と連携し、患者に対して一元的・継続的な薬物療法を提供することで、地域包括ケアシステムの中で役割を果たすこと及びかかりつけ薬剤師・薬局として、在宅医療への対応やセルフメディケーションの支援、健康サポート機能の充実が求められている。病院薬剤師においては、チーム医療の推進・多職種連携による病棟薬剤業務の充実及び薬の専門家としての薬物療法への積極的関与、入退院時等におけるシームレスな薬学的管理を実践するための地域薬局等との連携が求められている。

他方で、製薬会社によって開発される医薬品についても、抗体医薬品や核酸医薬品、遺伝子治療薬や細胞治療薬といった、従来とは異なる作用機序や構造特性を有する製品が開発されており、これらに対応するためには、高い研究能力を有し、新しい知識を拡

充できる人材が求められている。また教育面においては、薬学部・薬科大学数がここ 20 年で約 1.6 倍に増加しており、今後もこの状況が続く又は維持されるのであれば、将来的な薬学教育人材の養成・確保が更に必要な状況となっている。医療人である薬剤師の養成のためには、教員は最新の臨床現場を理解しておく必要があり、臨床業務にも携わった経験のある実務家教員や、臨床薬学など実践的な薬剤師教育に関わる教員を増やす必要がある。さらに薬学教育を通じて課題解決型人材を養成する上では、基礎・臨床ともに研究能力の向上が不可欠である。最後に行政面においても、国や地方自治体において、薬事・感染症・食品・環境・薬物対策などへの対応の重要性が高まっており、医療・介護分野への対応も含め、薬学に関する専門的知識を生かした行政官の養成が期待されている。

このように、薬を取り巻く全ての業界において、必要とされる人材の高度化が進んでいる。薬学部６年制化の後、薬の専門家として高度化する医療を牽引する人材を輩出し、中国・四国地域でのリーダー的立場にある本学としては、指導的立場となり得る高度先導的薬剤師の養成とともに、薬学の将来を担う指導者・教育研究者へと発展可能な人材を養成することが責務であると考える。

また、2018 年医師・歯科医師・薬剤師統計によれば、全国における薬局・医療施設に従事する人口 10 万対薬剤師数は 190.1 人であるが、岡山県における同薬剤師数は 182.3 人とそれを下回っており、継続的な人材養成が必要である。さらに、電子処方箋や電子版お薬手帳等の ICT 化による情報共有をはじめとする、薬局・医療機関等の間での連携方策に取り組むべく、岡山県病院薬剤師会・岡山県薬剤師会・県内薬系大学は薬・薬・薬連携を推進している。このような連携を有機的・効率的に進めるためには、薬学に関する十分な専門的知識と高い課題解決能力を有する高度先導的人材が必要不可欠であると考えられる。

２）修了学生の最近の就職状況

①　医学学位プログラム

医学学位プログラムの母体となる医歯薬学総合研究科の各専攻における医学系講座所属の修了学生の就職状況については、2018 年度から 2020 年度までの３年間の修了生はそれぞれ 109 名、100 名、98 名であった。そのうち、就職希望者はそれぞれ 104 名、95 名、94 名であったが、就職率は全ての年度で 100%と非常に良好であった。就職先の詳細としては、大学や研究機関への就職が 51 名、岡山大学病院を含めた医師、薬剤師、医療技術者等の医療業への就職が 235 名、その他事務職等への就職が 7 名で、修了生の能力が非常に高く評価されていることが伺える。就職先は主として医療機関、大学教員、研究機関が挙げられる。医療機関は主に中国・四国地方の関連病院であり、地域医療への貢献に繋がっている。将来的な世界的規模での高齢化社会への移行を考慮すると、医学学位プログラム修了生の需要は大きくなっていくと予想される。（資料２・３）

②　歯学学位プログラム

歯学学位プログラムの母体となる医歯薬学総合研究科の各専攻における歯学系分野所属の修了学生の就職状況については、2018 年から 2020 年までの３年間の修了生は 103 名で、90 名が日本人、13 名が留学生であった。103 名の中で５名は出産等の理由により就職を希望しなかった。就職を希望した残り 98 名については全員就職した。以下、就職したものについては、日本人 88 名のうち、81 名は岡山大学病院を含めた医療機関において歯科医師として就職した。医療機関は 53 名が岡山大学病院であり、28 名は中四国

地方をはじめ、全国の医療機関にわたっていた。岡山大学病院に就職した者は専門医を目指しているものが多いと推測され、歯学学位プログラムの需要は高いことがうかがえる。臨床歯科医師以外には、医療職２名、研究職２名、教員１名、公務員１名、獣医師１名であった。留学生 10 名のうち母国で教員となった者は５名、残り５名は本学を含む国内の機関において継続して研究に従事した。日本人、留学生共に就職率は非常に良好であり、修了生の能力が非常に高く評価されていることがうかがえる。就職先は主として医療機関、教育機関、研究機関が挙げられる。（資料２・３）

③　薬学学位プログラム

薬学学位プログラムの母体となる医歯薬学総合研究科の各専攻における薬学系分野所属の修了学生の就職状況については、2018 年から 2020 年までの３年間の修了生は３名で、全て社会人大学院生（病院・薬局薬剤師、あるいは薬剤師免許を有する他大学非常勤講師）であり、博士課程で身に付けた高度で実践的な専門知識等を社会に還元している。（資料２・３）

３）医療機関・企業等への採用意向調査

①　医学学位プログラム

医学学位プログラム修了生を採用する可能性の高い、岡山県内及び中四国地方の病院施設を対象にアンケート調査を行った。アンケート結果を資料７に示す。対象となる施設は 240 施設であり、104 施設（回答率 43.3%）から回答が得られた。修了生に期待する能力（複数回答可）としては、「人間性や倫理観」88 施設（17.4%）が最も高く、次いで「幅広い知識」72 施設（14.2%）、「高度な専門知識・技能」71 施設（14%）、「チーム・ユニットの意見をまとめるコミュニケーション力」71 施設（14%）であり、これらの能力を身に付けた人材が必要であるとの回答を 96 施設（92.3%）より得た。このことから、我々が医学学位プログラムで目指す「人間性・専門性・課題解決能力」を備えた人材は、博士課程修了者を受け入れる施設のニーズに合致することが示された。

採用にあたり、どの教育課程の修了者に興味があるかという質問（複数回答可）には、「全て興味がある」20 施設（13%）の他に、「グローカル医療人材養成サブプログラム」57 施設（37%）、「医学学位プログラム」29 施設（18.8%）、「メディカルデータサイエンスイノベーター養成サブプログラム」23 施設（14.9%）と回答があった。104 施設中 101 施設（98%）が博士課程修了者に興味を示しており、我々の設定する学位プログラム及びサブプログラムが社会のニーズに合致しており適切であることが分かった。

教育課程における変更について、本研究科博士課程の改組に伴い、大学院生を地域医療機関に派遣して研究課題を探索する授業科目を設定することについては、95 施設（91.3%）が協力的な回答をしており、地域医療機関の協力を得られることが示されている。そして、当該施設の職員が、改組後の本研究科博士課程で学ぶことについて、83 施設（79.8%）が肯定的な回答を示し、好意的であった。さらに、改組後の修了者を採用する意向がある又は施設職員が改組後の博士課程に入学することで能力向上が期待できる、という質問に対しても 87 施設（83.7%）という大多数の施設より肯定的な回答が得られた。

以上により、改組後の医学学位プログラムは、医療機関の人材採用の意向に合致したものであり、修了生を採用する意向は十分に存在し、また職員の入学についても半数以上は理解が得られていることが分かった。

② 歯学学位プログラム

歯学学位プログラム修了者を採用する可能性のある機関として、中四国地方を中心に、歯科に関連した診療科を持つ総合病院と歯科医院及び関連する医療施設 56 施設に対して、修了者に期待すること、修了者の採用、職員が大学院として学修すること、大学院生の受入れについて調査した。アンケート結果を資料 11 に示す。27 施設から回答があり、有効回答率は 48.2%であった。

アンケート結果によれば、これまでに本研究科博士課程修了者を採用した施設は 17 施設（63.0%）であった。本研究科博士課程の人材育成において、修了者が持つことを期待されている能力や知識（複数回答可）としては、「高度な専門知識・技能」が最も高く 25 施設（16.1%）、次いで、「人間性や倫理観」が 23 施設（14.8%）、「情報収集・分析力」17 施設（11.0%）、「幅広い知識」16 施設（10.3%）と続いた。そして、我々が人材育成において必要と考え、アンケートに設定した能力や知識の全ての項目に対して、半数以上の施設が期待していることが示された。さらに、想定した能力や知識を身に付けた人材が必要と大いに思う施設は 17 施設（63.0%）で、必要と思う施設 7 施設（25.9%）と合わせると 24 施設（88.9%）となる。これらのことから、改組後に予定している人材育成の方針は、修了者受け入れ施設のニーズに合ったものと総括される。

採用に当たり興味のある教育課程の修了者では、歯学学位プログラムとボーダレス歯学研究者養成サブプログラムのどちらにも興味を持っている施設は 13 施設（48.1%）と高く、歯学学位プログラムと回答した施設は 9 施設（33.3%）で、ボーダレス歯学研究者養成サブプログラムと回答したのは 5 施設（18.5%）となっている。また、どちらも興味がないと回答した施設はない。以上のことから、歯学学位プログラムとそのサブプログラムの設定は、社会のニーズに一致することが示された。

教育課程において、大学院生を地域医療機関に派遣して研究課題を探索する授業科目を設定することについては、20 施設（74.1%）が協力的な回答をしており、地域医療機関の協力を得られることが示されている。そして、施設の職員が、改組後の本研究科博士課程で学ぶことについては、積極的に勧めるが 9 施設（33.3%）、勧めるが 8 施設（29.6%）と肯定的な回答が 17 施設（63.0%）であった。さらに、改組後の修了者を採用する意向がある又は施設職員が改組後の博士課程に入学することで能力向上が期待できる、という質問に対しても大いに期待できるとの回答が 12 施設（44.4%）、期待できるとの回答が 6 施設（22.2%）であり、併せて肯定的な回答が 18 施設（66.7%）と多数を占めた。

以上のように、改組後の歯学学位プログラムは、医療機関の人材採用の意向に沿うものであり、修了生を採用する意向は十分に存在し、また職員を入学させる意向も一定以上存在していると総括される。

③ 薬学学位プログラム

薬学学位プログラム修了生に関連が深いと考えられる病院、調剤薬局、製薬企業等 72 施設・社に対して、修了生に対して期待する能力や修了生の採用意向、また就労済みの職員・社員の入学意向などについてのアンケート調査を実施し、23 施設・社から回答を得た（回答率 31.9%）。アンケート結果を資料 14・15 に示す。

修了生に期待する能力（複数回答可）としては、「人間性や倫理観」18 施設・社（17.0%）が最も高く、次いで「チーム・ユニットの意見をまとめるコミュニケーション力」17 施設・社（16.0%）、「高度な専門知識・技能」14 施設・社（13.2%）、「長期的・短期的な課題設定能力」、「課題への探究力」いずれも 12 施設・社（11.3%）の順となり、人

間性・専門性・課題解決能力が求められていることが分かった。薬学学位プログラムでは、学修者が教養力・専門性・コミュニケーション力・実践力・探究力の５つの資質・能力を身に付けることを求めており、薬学学位プログラム修了生の能力と医療機関・企業等のニーズは合致していると考えられる。

また、修了生の採用について、「興味がある」と回答した施設・企業の数は 20 施設・社（87.0%）であり、関心の高さを伺うことができた。さらに、就労済みの職員・社員の入学意向については、「積極的に勧める」及び「ある程度勧める」と回答した施設・企業の数は８施設・社（34.8%）であり、否定的な回答はわずか２施設・社であった。入学後の能力向上については「大いに期待できる」及び「期待できる」と回答した施設・企業の数は 15 施設・社（65.2%）と高い期待が寄せられ、否定的な回答はなかった。

以上の結果から、改組後の薬学学位プログラムは、医療機関・企業の人材採用の意向に沿うものであり、修了生の採用や職員・社員の入学についても一定以上の意向があることが分かった。